ALLSORTS Vol. 23

KIJURO OKAMOTO

岡本 喜十郎
グラスアーティスト

TEXTby 村上 慧
PHOTOby 大田 メグミ

PROFILE

一九七六年・立命館大学産業社会学部卒業。一年間サラリーマン生活をつづけた後、思うところあり渡米。サンフランシスコのアパートメントに飾られたステンドグラスに触発され、帰国後、創作活動をはじめる。アブストラクトな図形で構成される氏の作品は、一般的なステンドグラスのイメージを超えた独自のオブジェとして、現在高い評価を得ている。
アトリエは、京都市北区大北山原谷27−3。

光の彫像。

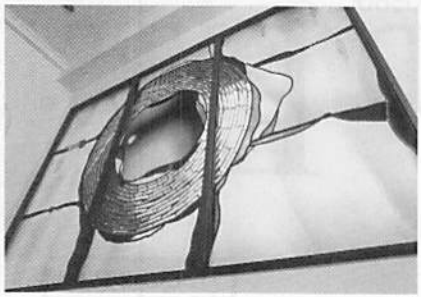
音楽が好きだという。アメリカに滞在中も、趣味で活動をつづけていた。得意なジャンルはブルーグラス。だが、時にはジャズやアフリカ音楽も演奏した。パートはヴァイオリンだ。

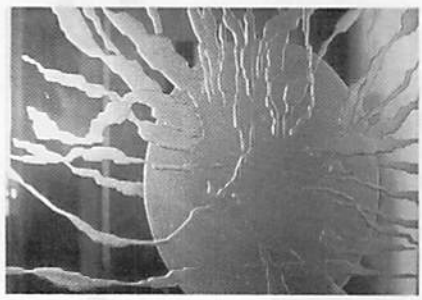
「あの頃、壁にぶちあたったことがありましてね。というのも、フリースタイルでアドリブをどんどん展開していくような音楽についていけなくなったんです。考えてみると自分のつくりだすフレーズは、どれも誰かのコピーとか、マネをつなぎあわせたものばかりだった。まわりの仲間(アメリカ人)も、〝お前の音をもっと出せ〟という。でも、二十三歳の僕はそんなことを考えたこともなかったし、実際に自分の音なんてもってなかったんです。それに気付いたときは、ほんとに悲しかったですよ」

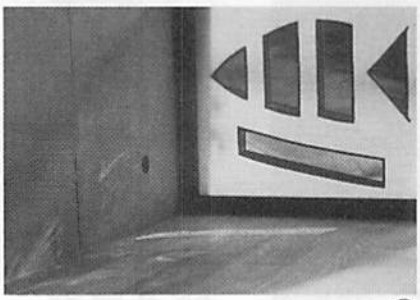
自分を表現できるものはなんだろう。そんなことを想うとき、アパートの窓にあった一枚のステンドグラスに目がとまった。宗教的なものではない。グラフィックなデザインで飾られたそれは、注意すれば街のあちらこちらで見ることができた。そのとき、特に強い感動にとらわれたわけでもなかったという。だが帰国後、ステンドグラスの創作で身をたてることを決めた。

「ステンドグラスの作り方は独学で憶えました。それで、少し自信がついたところで、小さなランプシェードや、窓に吊すパネルのようなものを店に置かせてもらうようになったんです。

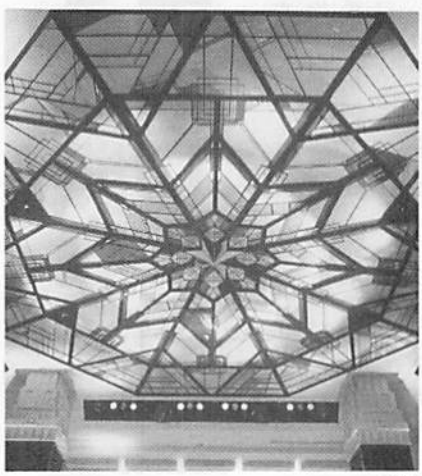
そう・・はじめて売れたのは、ちいさなパネルです。三〇センチ四方くらいの大きさでね。デザインはその時の心象風景をアブストラクトに表現しました。具象にはまったく興味がありませんから、今でもスタイルはおなじで







写真①京都市中京区柳馬場錦上ル「ハイランドコート錦(メンタルフィットネスクラブ・セリエ)」の二・三階、階段踊り場上部に設置されている。大きさは二七八×一八二センチ。タイルのような部分は一種のプリズムで、虹色に輝く。幾何学図形と手描き線の組合せが岡本氏の特徴だ。
写真②最近手掛け出した硝子表面を腐食させてつくるエッチンググラス作品。個人宅の廊下扉。
写真③魚屋さんより依頼を受けて制作した作品。玄関扉に設置されている。
写真④フランクロイドライト(建築家)をコンセプトにしたという作品。東京・代官山のディスコ"ＦＬＷ"の天井一面に設置され、バックライトでサポートされている。



作品のヒント、ということで
日常生活をながめてみると、
毎日はとても刺激的です。
ただ道を歩いているだけでも
いろんなものが見えてくるじゃないですか

す。ただその時は、こういうデザインが受け入れてもらえるのかなあ、と半信半疑でした。幸いすぐに買い手が現れ、それ以降もずっと好評だった。それで、これはいけるナ、とね・・・」

はじめのころ、うまくいかなかったことのひとつに、ガラスを切る作業があったという。馴れぬ上に、"危ない"手を切る"との思いが交錯し、それが手を怯ませた。ハンドメイドのアンティークガラスなどでは、おなじ模様のものがない。失敗すればやりなおしも効かない。厚いものや薄いもの、モロいものにネバリのあるものと、ガラスには無数の個性があった。

「それでも、テクニック的なことで、あまり悩んだことはないです。いずれ習熟すれば解決していきますから。それよりも、今、自分が何を表現したいのか、それを見極めるための葛藤や迷いと対決していくことのほうが、はるかに難しかったですよ」

ステンドグラスといえば、やはり窓である。岡本氏も創作テーマとしての"窓"は常に意識している。事実、仕事の発注も窓へのアプローチが多い。

だが、素晴らしい風景を望める窓にステンドグラスをはめてくれ、と言われた場合、氏はその仕事を断わることにしているという。風景を取り入れるため、一部にのみステンドグラスをからませることも多い。ただこれを単なる自然礼賛と捉えるのは少し短慮というものだろう。むしろ、作家としての矜持をそこに感じる。

仕事が決まると、建築家とは徹底的に話合う。その建物のコンセプトを、"感覚的に"理解するため、建築予定の敷地にも必ず足を運ぶ。そこから得られる波動のようなものを、デザインの中に取り込んでゆくためだ。建築中の建物にも入り、採光条件などを充分検討する。ステンドグラスは、光を受けて現れる"影"も重要な要素である。太陽のうつろいにつれて、ガラスの影が室内空間にどのような波紋をなげかけるのか。それは氏にとっていつも非常にたのしく、難しいクエスションだ。

「作品のヒント、ということで日常生活をながめてみると、毎日はとても刺激的ですね。逆にいえば、誰かの写真や絵画をみて触発をうけるということはありません。

それより、ただ道を歩いているだけでもいろんなものが見えてくるじゃないですか。僕のつくるものは、すべて僕の心の中に浮かんだ、心の風景を現しています。自分が触発されなければ心象風景も浮かばないわけですが、僕自身の世界は、僕の生活の中からしか生まれてきません。今日、ふと目にした光や、色や、形がどんどん成長してひとつのモノになっていくんです」

今、岡本氏が最も創作してみたいものは何だろう?

「物理的なことで云えば、今はより大きなモノをつくってみたい。ビルの窓一面をつかってみるような・・・・なんというのか、フラットとグリッドだけで構成された壁面を、巨大なステンドグラスで覆ってみたいな、ということをよく想像します」

かつて、内なる自己を求め悩んだ二十三歳の青年は、今、光の彫像の中に"無数の自分"をみつけている。